

なった。厚く御礼申し上げます。

文 献

高島 勲・河田清雄(1981): タイ国の地熱エネルギー資源. 地質ニュース, No. 325.

河田清雄・正井義郎(1982): 地熱探査が進む北部タイのサンカンベン地熱地帯. 地質ニュース, No. 335.

河田清雄(1984): タイ国北部における地熱開発の現状と将来への展望. 地熱エネルギー, Vol. 9, No. 2.

ITIT (1985): 北部タイにおける非火山地域の地熱エネルギー資源の開発に関する研究. ITIT, Rep. No. 8011.

JETRO (1983): Basic Studies for Geothermal Energy Development in Northern Thailand. The Japan Industrial & Technological Bulletin. Vol. 11, No. 3.

KAWADA Kiyoo and MASAI Yoshiro (1992): Development of non-volcanic geothermal energy resources in Northern Thailand with special reference to power station at Fang.

〈受付: 1992年5月22日〉

新刊紹介

日本の地質 9 九州地方

日本の地質「九州地方」編集委員会編  
 代表編集委員 唐木田芳文, 早坂祥三, 長谷義隆  
 共立出版株式会社, 380 p., 9,270円(税込)

1986年に「関東地方」の配本で始まった本シリーズは、この「九州地方」をもって全9巻完結となった。本巻の記述は他巻と同様に体系的かつ網羅的なものとなっており、引用文献の数は2000をこえている。「西南日本弧と琉球弧との会合点にあたり、地質学的に重要な位置をしめている」九州地方について、本書では総説、中・古生界、新生界、火山、海洋地質、応用地質、地下資源、地球物理、地質構造発達史の9章の構成で、総合的な解説を行っている。

全体を概観した第1章の総説に続く第2章および第3章は本書の根幹をなす部分で、「西南日本主部の地質の帯状構造が大きくみだされている」中・古生界および火山活動が活発に続いてきた新生界がそれぞれの章で詳しく述べられている。

口絵に雲仙普賢岳の赤熱したドームと菱刈鉱山の金銀鉱石の美しいカラー写真が飾られているが、雲仙については、第4章「火山」の中で1991年火砕流が地質図に示され、火山地質学的に解説されてい

る。この「火山」の章では阿蘇、桜島から南西諸島の小さな火山にいたるまで洩れなく記述されている。なお、雲仙については第6章「応用地質」でも、防災的観点から最近の活動が紹介されている。

第7章の「地下資源」では、一昔前まで九州の産業を大きく支えていた石炭に関して、地質学的側面のみならず、開発の歴史的側面についても触れられている。また、金属、非金属鉱床については小規模なものまで含め網羅的に記述され、資料的価値の高いものとなっている。さらに、金とともに現在の九州を代表する地下資源である地熱に関して、開発中の地域まで含めわかりやすく記述されている。

第8章「地球物理」では、重力、キュリー点等温面、地震等について記述されている。この章は最近の火山活動、テクトニクス等を考える上で重要な部分であるので、もう少し重きをおいてもよかったように思う。最後の第9章「地質構造発達史の諸問題」では、中生代は地質構造区分に重点をおいて、新生代は時間軸にしたがって議論がなされている。これで「日本の地質」は全9巻揃ったので、地域地質の検索、調査に大きな役割を果たすにちがいない。

(新エネルギー・産業技術総合開発機構 笹田政克)